手工隨筆

美弘

完

560
3

門 イ曾5
號 560
巻 3

廣辻氏藏書記

随筆　癸亥　四

皇國の上古ハ同母兄弟(ハラカラ)をあふ事ハなくて異母兄弟(コトハラ)ハいまだ今世にうけられぬことゝて人もいとにくみけるなど夫婦あらしもなれるハ世々のものゝ祭のかたらふくめる禽獣にちかきやうにいはれし古書どもを考て人情にかなへてたとへみるつるに思ある事なきにもあらしハなるべき理きこえなく夫婦のましらひハ女の家へかよひこれらをもし事にて今のごとく夫の家へむかへとりしあまりたる交らくてその子ハかの母のもとにて生長(オヒタツ)ものなることなれハ兄弟といへどいと疎く他姓の人と異なる事なし女どものこゝろにハいかなるうきりあらん

けなるもあるへし。よき女なとみていとえてしたふハ、みな人の性なるにかなしくもあらぬを、ぬる中なれハ、またきもしなききわしさ人情なる所なる思ひ神もゆるしぬへし。人とうまれけるしるしにもあれとも、これよりもなるかりけるは禽獣にちかき事しるあれは、さくるなと同姓不相娶といふ事を準則としてあしかる事にいふはわけて小人もあやまるといふとを事となる事之同姓相娶らぬそ周の世の法なれハ、これ周公の制よりそむくかといかゝ我の事を不知ましるなる事そむくなりといかゝ率性謂之道といふ事のやはりそむくへき。皇国をあのつかゝる皇国之周の制度をもちるへきゆゑあるましやはていふへし。夫婦兄弟

不婚しハさらに乖るるか、かくなれし今の世のありさまはここはしよりふしもおなしうちもよからくていつもしも苦かし。定よおもひいわりのなれをらしなあやまることに禽獣ちかくみそかなしき事にて、公にはゆるしなけれは禁ハあるなるへし。古も今しかれはましそれくいふれく是非をたる所もなとなり。学者は何事よつもてしもれ沿革するところを見るへきなるなり。

異母の妹をめとる事、上古は宮の家おのおのその本居に住みなれし言つたへせしものなれは、女もその本居にすみかれハ相娶るまて、なとかこれはこよりみとの女はけれまてもなるへくかく

さわしとのごとくて女やさしくなかる人は女
ハおのくるのはらよあらでなどこハさくまうしてか
よいふわけてもおもし母のはらくにて生長するのに
しあれどもけしの兄弟ハ中すに四郎へ入てくるかも
あらでいとしうときは中ちかりければ娶帝事をも憚ら
ざりしに平城の京より百官の第宅大なるハ帝都にあ
る事なれどいはそれの家もちといふらしを分れておのつ
から別ちもちとする事もありてやすさに親しくなれ
やうしよね娶らぬやうになりしとみえて事の遂ぬのよ
おほくハ見ずされ制度をあやまたぬ人情なしこの善

なりけむとおもへバまほろしものなれバ母のつかへあらし
人もあまたありて年経て今内宮となりてハ人情よりさ
ら快からぬ事になりしならむ萬葉集に玉葉集にもいもせの
歌どもなれとけるは古歌ありてこれらなるべしいもとせのなつかしきを兄
妹の名をも伝はまりしと疑ふへりはずの卿との歌にハ
て詠めるて侍る参議宗中すゆく芳野の川くあせなん
妹背の山をこえてこら穂く返し参議峯守卿女妹背山
けるよりこえてやまぬへく吉野の川をえまたれしとそなかり
新千載集にいもせの影みるこえ家やまぬへく芳野の川
ハよそれしとそ妹もふと中侍るれはよある濁る瀬ハたへしとうそ
水しおるハすみなんと流たのこころあめ文漢古今集イ

身はなん涸瀬にしらす妹脊川かゝりぬへきこゝちなんこ
してとあり。世にうけたまはりしあの人伊勢物語に袖
ふれてこゝろ若草をといへる返しにうらなくものを思ひけるかな
このあらけるなとは今の世にきのなしといふかたの外にて、
その間のことあらきなくおもほえし。狭衣の物語。源氏宮
は大将よおもひのまゝんはいとよき旅あらはなるへきをとりけれてなれに
なまめきものゝ宮のおぼしたるにおなしめとはなくいひうれ
ありしゆゑそこれにかゝりけるとあやうかりんを思ひ
ことは禽獣なり。

一 續日本紀に養老三年二月壬戌。勅令天下百姓右襟とあるは
それより前は左衽なりしにや。今按ずるに左衽も便あ
しきにもあらねど常にしらざりし中に右衽はなるましく
うしむも知らずとも何もたしかなる便よきとおもふなり。大宝の
衣服令も唐の制に本づきたるものなれば、そのはじめより
礼服朝服は右衽なるべけれど、下々の者にいたりて喪の服など
にはなほ事なき左衽ありしにや。有るにしたがひてはまたなく
まりもうちうしろをいやしげにいはれては、この時始まりしより
なき事におもへるは、論語に微管仲吾其被髪左衽矣
とあるをいやしみなきものゆゑなり。此被髪左衽は只
夷狄といふ事なるを、おやまりてのみむいひけるにて先王

の礼制なくしてハてうらい夷狄のなりとなりハてんとぬるか
事なりそれの夷狄とていやしむる事ハあつかいなしむる
なあれ彼髪を祝ふ入れる事なれともわかる文化内なを営ハ化
外なといやしめ本国をあかゝ他国をとかすハ古今一般の人
情なれハ常なる人といふへくしかなし事なり孔子も被髪
左衽の国にうまれなハ髪長太祝といやしめなんか
此守将くなる上天の見ゆるなすくはじめた祝古祝何の
尊卑かあらしすつて濁世のかの生ける孔ハ孔子の法
こふかとまねなしさせてかくわしものとなるらしなるいはゞ
ほうたのきさるかなしきかや

古き家なと廣く事もなくしかもそのよりも多かるよしをも
心ある人と、中に厚葬をいふしきおこいハ此ならる之ある八
く世波の見るなる山賊海賊なとも此なるしかものなれハ
中し偏なし皇国もてなかき世まんにけるこそくしなる也
しるを世であらんる事なれもしからな勾玉陵なとやうの
ふれしの古きあるといふしらもてハやしあはれふかくに
いふてけるものえまおしるて古きは墓とも、あらく事きこ
田なるいにしへしよし心うきされはくその営よそのいふこい
みなるも今を座めるよまるへもしと文ものしか世の遺
組あるハ同氏同統の人なりしいかてかうちつけしけしぬれ

人として指る骨をうきあるは清れてはしもとしぬき
勉よまふれ聞しかみすいねくすゝめしみははかられて
身れも心沈そろ宮きこゝ死をはかる言れものゝ多分に
ぬしかもふらて古を考るらりまをそいふめる清を
わりあしきるは世を考えるき事なしハそれ志るを
もなてふすゝめもいはしへを考へむなをハ高きやハ
うぬ書をとんあきらしる力なくていく百千の巻を
あつきていくふるはの古き器をえよむし何事
とハ考いてんいゝて古き事なり。そむしかろし人
産はしめよりよしぬ事とたりなしし世のふるつき（きき）

ましにうち出なんよりハ宮をしいつるらけなれを指はる
はるて方もあるをこれを好事（スキ）しきすはらハかわようなる
死ぬもしてきそうろふよいひおるなきてまゝよいそん方
なしおなはふし。
主ころしの例ハ眉輪王なれハいてやしとしきゝ皇親を
志りとも年いとぬはなく親のはさるあるてはへあれいたしる
逆臣れ例もといふへし獲戎れ馬子てとそうしろくし大に
なくしきるなくもよろしき母ぬすしハはへて君をそし
せまつれはなれ文親ころしの例ハ推古天皇三十二年
小有二一僧一執二斧一殴二祖父一とありてこれは僧正僧都法頭

なき置く事なり。律條にも祖父母あるをと一族なしされハ。
これ的例なり。佛法にまをてもいさゝか許すと一人出
比丘一人ハ優婆塞として罪の門ひらきなんあやしきまゝ。
けるにましも朝廷に背くハゆめゆめのびあらし文あやしき之。
名されバいふ詞されども去の字之春行くを秋されたなる
といふ事も同じ。名のりの去の字ハ助語して。意義にあらず
それ詩にも老去郷去なとの去をさして和漢合せたるにや
名ざれハときて名ざれハ名されの義にはず。畢竟の説ハかね
て去字の義なりとしけどもは詭えしき事なり。大蔵卿行
宗のみは余人ばけしねなどゆる人なき名されしむけりとおもる

神垣の友。治暦三年三月十五日備中守定綱朝臣家歌合。
基綱。朝臣ますらをが頼むよゆふされの春の霞ハ立まよひつゝ。
まの字ハ義としてハよしものとまつらす なるなる名されの説之名は」。
江戸人の。けりなき人なりとてヤボといふ。世説注に。意趣野鄙」。
なき物語に。草花をお栽といふ事。尾張の風俗。草花うゑる地
をお栽といふ。なるなりしかり。江戸人ハ大根千房菜類なとし
も前栽といふ事を説あり。それハ後園といふべき。
ひきなることは皮の名なり。蝦蟆の層のごとくつぶる紀
これハしりい事。延喜式部式に鮫文皮とみえたるこれ
なり。刀の鞘にまきする皮の良ハ。尻鞘といふものなり。それを

皺文皮にて造れるハひきはだのしほやといふべきなり今時
おもはせてひきはだといへく鹿鞘の事にもなりけり又今
流に成通卿の事の追記せる所に白河院法皇の御としを
の人にてたゞしき殿上人の中にてさへいひけるに
はなれておはしますとぞ雪ふりの御幸にひきはだにてありけるさし
きをくりぬきて人にみえぬ事に候ふべくとききて貧道とて
待しるひぬし此もとよりうそちまくしもちひくつかひ労すよ
きはやむしき労まかり労し給ひまひ候へはかくおもふ
して左り死をひきたる事なしと御中へと申せと
申されかれをおほしめしみなしきハなくてましけるに奇怪

なりとぞ仰られける近隣の古今をとふらうらは有けんと
死の色なきのうちをみとめつゝらなへ候ふをひき
はだのありしくは出すかしめしろしめしやとゝこゝろひきと
さハ何よりあるんかしハくさわと言便にいひける皺文
皮の鞘を所桐油にてぬりきることくひきはだいふ称を
思のすいしもちるへうを雪ふりの御幸みえしとかりしことを
あてゝ奇怪のこと
俗間に小石をざりといふ也さゝれいしと同言なるべし
されとさりもさゝしやもといふ小石を形容したる
之十訓抄に二拝すの覚讃僧正事あるなりて有職をゆか

はやるころ熊野に詣て山河のあたりをなしてしつらへたるへ
かきつしみの名をや残さんとおもひはかりし事古きに之
近ころ大口ハ孔よ出てさしく付たる物のなかりといふ説
いてきて今代にゆくまてあさはかり有んあるへきにや此
説なとよろしくとする事なれとも猶まちかひにやと次
大口も袍よ下袴あるかことくもとより二ツなから用
ゐたるものゆへまたかねてきたる事にて陶しあらたむ
なりしらん時此くる方しきまじき困ことよれ有へき
袍にそのなか袷も単衣もあれとそれより下袴ハきたるを
袴そのかはり世にハ赤袴をはいたるまてかろふみしあるし

いたてありわてきけはりんやかし大口の釋なしハ單衣よ
あまた下よきたるへし但しそへハ今代ジユバンはやりなる物なるよ先
ジユハン見て其うへはゆくする事をあるへくもなし又染
装束にて大口の色をもと換る事なるよゆくよ風流せんハ
とかのすまひなとく装おそれる事なかりうちとも
なる時ハ指貫をも略して大口ハかりにてなるも常の事也
いかよなしとゝのへるよ湯具あらしてならんやなし
大口とてもわなくも世富に帆大きくひろくあきたるもの
名なるへきよにうすへきならくはむ料なしも大口は世富もあ
まねへくや猶いまく新き者ても古とても大口見たるゆゑある文

才といふもしくはうくさへきなりくはてやハ有へき事大口ハ褌
なりし文その上褌にも草なりとも下に着てうけ縫なりし
なりけり後三年合戦の絵詞にも見ゆる縫殿式年中御服條に
春季云々表袴中袴各十腰料絹十六疋四丈 別五丈 糸
三両一分二銖 別三銖 袷袴草袴各十腰料絹十一疋二丈
袷 別四丈 草 別二丈 腰料八尺 糸二両三銖 別五銖 とこゝに中袴とあるハ大
口之褌ハおもくハ表袴中袴もしくは下のハ多くありしく此外に
付おもしき次今のゆくなり料の絹まて縫なりし事も
しらる式の中に御料と緋王の御料とを除て褌といい
事あらハはなるハ祭服當色なとはすハなくてもはなりよ

すらくはねまてそへてすゝるへきにあらねともさ皆みつ
からぬせし事なるへし。むかしの日記なとも證とはえ
さるか事なきも草なりとも下にみしらくて。なかも人あ
目にみゆへきにあらし文有職の家にて定あるへきにもあらねとおの
つからしるしおけるなり。大口ハ褌なる故にあらし文又中袴
といふ事も御料と緋王の御料とにはえて外にハなし
其内糸ハ褌なれとそへて三ッ並へていふ時ハ大口と中袴なれハなり
褌ハ何となくいひならへきなりもあらねとく表袴と大口とを
うちそへて褌を外物としるなりは中袴といふへき
ことなりなし奴袴より外なるも大口とせなし持なる

こはやがて下襲といふ事。褌と名を同じくすれど。褌は外
物にしてさらへけるなし。
緌といふ事ものは。文字よりいへばひもの冠なるべきに耳
のあたりに獣の毛もて扇ひろげたらしやうにてあるは
いかなるよりそれし事ともいふ事うしかしひつるにさもわ
考へざる事なりける。衣服令に皂緌とありて。謂冠
紘也とあり。その紘字は。左傳に衡紞紘綖といふ事ある紘
を纓自下而上者とあるにあたりてこれを二すぢの緒の
あたりを頷の下にあてて二ッの端を耳より上にて冠に
貫き結ひて。残れる緒の末をそのまま切りてしりたるなり。

あまれを二の端ふりしてありて。毛を水干の菊とじのふ
りのごとくとなる其菜とじ縫糸の末のかたちなるを
形容せしものなるべし。これは今一きはの威儀あらせんとて
毛もてつくれるなるべし。新宮式に緌八十二條とありて緒
なれば條とかぞへられたる時のことにて抜いふ
通りきこの姿なられて武官と賤者とにかぎりて
ありて立ちしく落冠せしの用とならる。老懸といふ
名は老人も本島なさる落ちしむ人は文官なりとも
通りてへきしやあらむ。又かけなといふ事も冠をゆひ
めぐらす條のおほかあらんされば蹴鞠の時の具と成りける也。

有職の中にも常にしらでかなはぬ事ある也」。
学問に志ある人は古と今とをわきまへしるべし
其ゆゑは心をつくして古のみ今をかへりみざらん
すらね沿革あるものその事をわかて心得べししらすう
つかまつるもおのか志あるをいへ文章なりとも今の世の作法
をもしらでいたづらに古のことのみ好むは志すゝめる和漢
の月ころやうやう移りて変事のさまにかはりゆく諸家
の作法にも家禄給分たまはりしもかはる事あるなり、
きるへきものも何ともの事毎朝夕つかふまつりしものゝ
ことものあはぬのこと次大饗為詠歌何れの御

いときゝわれは装束調度容儀指布なとあてられておせし
ものといふめその心得あらはまよくしらえはうしく一撮
米一文銭もなりて何事もなくおしてとひるしなく退
つかはれそのうへに物あてられておそとやられなさこそあるまあ
らなんやとおもふてやは有へきそは今の世の諸家の家法
にふれのたまはむ訓ならはらふこそ古より眛く今
も惑ふ知らずて古き書ともとすしも故人なりの論せん
とすことその説のあるへきやうあらましや古学をとなへ
てくはしきもまのいくる事なきくにまなふるとてくはなら
もろみのうんえしるあいさつの事よとの世のまなびましへ

ていふのしなされ當世にたハ凡識をしらえざる本意。
たゞへよりみて、ハおかりこハ今すこし書ハ体裁ぞし弁
ずハかりまでつこそくハあしものぞとわかれたるはそかし。
近くしらの沿革をよくわきまへめんと思ふへきこしもハあ
れとは事見識といふ物大きくしてはく書をもよくわきま
めて此をしえけるも説それをいひくさしかん正明なるの
ことし。あいってその大概をうきてはしへもしと思ふ
ともつうなくて知えねるなし多なる人も家まてし
ずいうはなくていましこえあせ次代くの先達も纔も思ふへのく
古今とうし弁ことおしなるやハ思ふるはかれとされ古継

とうろみせをいはゞ事をいつかまぬきこえわく苦衷なる
事なれ今さら前にわかる世しあくし様をぬ抜なる
はらんや。
中ころも赤肌のゆるをとその外よ恥しれなり女も
見苦夫なるをもとあしけれしもひて八尺え寸尺脇へつこて
物語なるをせしれ之禁中なる文理までしやいうこをも
けり所をお入すに送るをなくしきて今けしなる所をとる
まてよくしきく凡帳けるはハ額よ扇を押あておもかく
するまえはらむ髪といふハ今じじといふもとの髪を
魚のうへきものかくまて空きなみけて末をくくひろ

うしろりのこくすると皆なから、髪のうしろにかけて。片そくよわハさえはるかしものかしらいふとそその赤を
そきて短くしてしまれし都へハらしくとふれいなるや
しるへ扇をもさしてこわなき時なりとて由るし
せし料りや、わし山大和物語にみえすみらし、月のおりしろき
夜、こそそうな息所へ此の比そへしもとみおり分かまるを
ためにた忠はみつかひなり。それはあなかまいらしまわこき
うちき一かさねきたる女はいときよらなるおまてへいみしう
なすきなり。た忠をとらくめしてこせのかひなれたるかな
おかしていふまく、そて枕草子に清少納言か中宮へハし

然て参らせたるかと伊周公はとらへられて恥かしめらる
かゝる所よかしこきこみしはたる扇をはへとりのくさに
みうちへき髪のあやしはへみゆふに、そとあみ下す事
も衣行きといふをしてあるハ人の頭まはしき用させし
ものか。下つかたの者のあそれと七十一番の職人歌合に立君
はなやき居たる図あり。これまても大かた世中のはやらかなり
正明ハしめて京にあしらひしハ寛政のはしめなりきと云時ハ
被衣きたる女をみしくいつか宮と分けてはきぬ引しかく
此ゆかしの人もいひしかりあらす。又尾張国なとにてハ六七十
年乃ばかりへも人あきたるありしものといひはへる。

古き家にてもなかりける人の身まかりし時によりておもと
うちあるハ三昧なとい布衣まて志ろしき治ハおもふこと女こそ返
きるよりなるに女ハしろきころきぬを今もきるぞ名にしおはゞ
皆てうつきといふ世白うつりきこの事にて凶服の名のやうに
なりしに又白うつきかいてもむしきにかしこのうつき
を染うつきとなすなるは容ことひかれは なほ降液あなる名古
屋にて田舎めきたるとて此なうつきも着ぬ事となれるハ
紀をしきこそ志るに此江戸其の女としハことはるよ
領をいろくあらて肩まてもさぐりやうに寸又務きぬハなくて
の事なれとくろきぬとしもをつゝましといふよしにてすゝぬを

袖おほひにハあゆむにかく腕しろくあらはるゝはこともに
なりしこうしもなるところハ数ハうく佐ねこうかをぬきては
指のはきなきを佐しあるハ佐を朝野羣載に出たる
進退傳に取笏之後不顕両手左手之上覆其袖之端
側手隠袖取笏とこそ又弁官抄に欲揖之間以左右
手把笏不顕手まて持笏事右手把之不令動揺笏以左
手引右袖鰭天人差指與中指之中引夾天拳ヲ蔽（カクス）
人差指許令出也ここにこれ類なほ多かれとおもひあはる
まにハ一ツ二ツしるしぬおよそ袍のそで下に縫きるし表袴の下ヘ
大口きるも指貫のしたにハ袴きるも又縫腋のしたに半

臂きるもしらすかたらひて盟あへるはしめ事なりされと
ての男達なりしかるに今の江戸はかりの武家の召仕ハ侍より
ものゝやうにして下すへてとよはるゝまて冬もさむきをしのく
ことなくて赤肌をあらはすを礼節とするなりしハ乱世
なりしなこりなせしかははなはたしくみえしを今もなほ
そのなこりひのまゝに身をそろふるなるへし下さまはかきらいハエン武
の者なといふよりさへ常裸（アカハタ）にてひな肩のあたり
尓らはしの絵を彫いれて墨さしとゝめ尓青く
赤くゑとりなとして父母の遺体をきすつけて風流する
おほましき事なり又文身といひていれすみ人もあり

事なりし又その頃日なし夜太になりおもしけてなる事
ハおなれと思ほとしいましてん人なりとよはるゝ事ハなか
りしなき事まて此頃の大御代たれ月代のすきまけ鬢中
よりみえしとて荒漂なる事に玉海しとそ思ひし
を今ハなくて思ほうしきるものハなくて月代もひろけれ
そのかみまれて僅ねなりハ此比てなる事侍てなん
長髪まてしひいまそらしく傍をいふよ時世をあらふ
かはりもていくはまりりますやハし給へるかく
文身に迄あてのひおせしあり今ハ六とも聞けり
なりけし麻生の谷町尓彫八といふ工匠ありて一日ゆ

御祖そしてのゝしりはなくを書ちらしおきけりの人
くようつくるよ此里つきひて割されを付たまへるふ
やうなれる木して家ぬ立てるいとしう後うしきこ
其のまゝ世のうきつゝいきひてありくるり身ひといひつゝ
立ちよく人しせむるまゝて其ほ思をよくしりもしれは
何りし給ふとや大名おりし頃その里なの稲荷の社を
すりせられるよ茂八その事うけたまはりて造りけるか
棟上られる木をあげけるまゝへ勇ひしく人々をなおは
もひろ思ひてせし事も得ると心つけて此忠たれは法
もなくやましのふかさほかるへいでよたすかり得ぐへしやとて

取るく情め奉らむとかしこまりつねきやせとゆるく法し
きもなくて二三日は過ぬ夕つかといふくるひまたれるよ此あ
とりの若の者何りしくや茂八か家をさしつる時もつねに
つかはれて世をまゐるとのへかうおほそをときゝて此ふるひ
来しかり深のあさりまきるものなしきはわしりまつひて
みもしらし深のまゝにてつと入来ていふやういかに茂八
は扨よるふといふ事はまことにいふよ茂八とし身かりて侍る
事侍れとされはこくわそめたる事に侍るをこゝろなな
人のかしたのむやとかるひし事は身まいらしおそれなりと
こゆさいひしはいつ孫茂八か願の下まてめこをもやしなへは其の

しれてあらしさうふりなれおくしかうすらいとなく
かなれとはくれあらしてむしこましおつる事もこれあれ
とうけくあらひなりていつくいれるはましてなそう松
うさ夜八なとなやまみすんやくあらなんやはしもふうさき
めうせむとみてはよしかしろあるしく今あら侍ぬにし
いうしなすをあのひそ空てを押すりてうぬ汗あえ滲みて
していとくるしなえはしし必といひてあくいく跡そて袖
よくるふれくあなしはまえ家のうちの人しれでうし
あそれつんなるあはひく旅のしとはうとあかひたう
その心そとしあそしやてま心もえれて文の動くまゝ

夜八ならまりみなれかしとほるはまきのふに笑なり寸法て
八読くしそわうしとあうひてあそるあらけむこそく
と責もよかしてはてうつれぬあくいぬなけ見送り寝
袖うらひ宮なよあうらひてあるのやりうかあみのれを忘
あくしみりふやとい事はいそとへ今ハあらつへいとくるし
なまるえつるものそことへ袖うらひはるり念ある津にし
みのれしいむうし拙野よりすくし此文見せ人の意わすして
那智の瀧をふしれしてあかしつるを見てもわしおなしきいと
しくしく彩つきさなくいうりていとしそあそうしなかり
しうかれの肩腕よそのうへを画きこるをとれいふしそれ

なりぬれば死して身まかりてもおそろしけれは、わか身をまもらしこゑ
はらひそめれしこゝろへしらぬ人々あきれはてゝしぬるもあれ
しとてかなしさありのさまをありのまゝにかたりつたへて
悪しくおもふ人はなしといふをかひえぬもつひに恥ち
になれり。
ある里の古き死したる名なき虎といふ事、子なくんなきも多く
もちかたりしその里の庄屋、かしこきこゝろあるもの
まく世すくへしてさてかなしむ也。人々死もはかりもうるあ
中にもたのりしきものゝ心あはれにして何れの作にもかなしみあるを
うけたまはりて若狭のまゝに紀しなどとぞいひしとぞ。

も里あつかひはじめてもいきかひあるものなかりけ
ある日虎、庄屋がもとにゆきてせうそこ訪しに庄屋おあ
ひやかにいふやう、虎おのれいかにしてかく肥満しけるかな。死猿
して身のためにあしきめや用心せよとあかはずしいふにさう
我の色まくなすあつてうしろへあへていてねばさす
まへかゝての心のおもふことをおもひしかれをきよひあつ
めでたき事、庄屋は様子まうしてつるにかうしてなんのかへ
つれて早くきん死もせまそして猪腸はなすてふ事なり
いふ事、子なきもおのれも早かけを伐れとおのこあ
しる事。この人またもせかしき大事なれ。あれな

まもてうしめられけ路のまなじりをそ。いひてからしこてまつ
らしといふもあわはねもなくしなふりがる大事よ
もれなきかしのふられしき在庄様のはんけしかるて
気しくまいひて立ねをりおそろしとおもひさわ。大きる
親分の不當まおいまなわ。はく気なくハ切るものゝて女ら
もーの心ていまんをはくしつることのあまりなりしか
らすうてせめられておかゝまの人。ちかきわるハ悪事も
用ことくハなるからいまんとやんやまうねとんなどい
うてうしゆむそともいむまむとハ何事ぞうおかむいう
て地主家人よあひて閑定てしりかくおすなくきく

おなつなりみなひらわ。それきゝて何よろしのふ何
されとても死ハつとめなわ。身の上あしうる事て用させよ
とあわつ原法詞まで。なやし事ハ定かねといひてうおひ
条。これも合まことわりそ。こてとしきハ虎か身のう
へなわ。けるまでも絶勝をれ。ひとき人かとハしなものゝ事
もやわむ。ときしろもされも立ておし事もあれとも。今
といひてうゝ。審なる箇やるより外のそれハ何事にし
侍るともいふ。ひまんしのまハけれんよ。庄屋殿様のいへる
ひまんせしか。ゆゝしき事也といひてそらのまなじ。はても
身は置所なきまでひまんするやしやハおかゝ。あはれまし

なといへとも天道神明おそれしも次第なまんさくしはらくいふ事皆
もしはれぬへし。桜のの事よ人の語にはまんぞくしまん
させするとも行なひを欺きとくとすまいて口おもなくしもおち次。
はかりてもうくておかしきかいうかめられわのいひていいとうろう
なんまり二ヶ月ありけり八隣国よりのひてかくるか世上の事
しきりりてやりて若や情もとておかしきくや八月
なくても何事もあるへしかるを子ならいなんとまり
いて家中にあなくいふなとく庄屋らもとに行きてくあらぬる。
うちかおかしまひ次々といふ事、何事なとしても情ひつゝ虎八八動
南まし今は家に侍りしを、母なとし事おいてなにくしらき

人からるしら。頼久に嬉しんでそらのうなり行よいく
おもられよ恩のくつられ侍るとのひてまでとまさひしなおり。
なお今はあるを虎の来らはるゝ侍るをんでつゝてとまひ
もせはつきはなかのかかしつる事もなくわりしよいてはハ
いふれん。肥勝しつるか家事を作りけるあとくるけす
侍しいふようしくてなどの方に肥勝しんやまり過
うる事そよ大酒のむなやおまわりとえていとしなま
うゑしらん中風なるのおくしんらゆくしはよ湯薬なとも
てせとえみりいて用とせしとひつるはいてたちぬよんかお
ちかては事なまりなりとてる行くりかなんそ。

殿といふ事は。敢て其身をさゝず。居所をさしてよぶ詞也。物語にも多く見えて古し。様といふは方角をさす。西ざま東ざまなどいへばさまの様也。五百年以外の日記には。洞院様。西園寺殿なども有て常なり。これ様といふものゝ名といふも同じくて。方角をさす也。さりながら今はする所をさしていふ也。されどまさしくその人に対して様ともいはゞし事はなし。室町殿の比より。等持院殿様。鹿苑院殿様などいふことありて。そのうへ殿がつきて尊卑なきやうにてされど今はこの殿様といふ事なきほどになりたるなり。今やうは其身をさしてもむきになれば。方角をさす本の義違ひて

いふなり。茶壷といふ事狂言に判断なくしてこひの人あれは撿断殿様といふ事。世上なくていひしなるべし。今なきてもきこえねど。尾張浩の民なる庄屋殿様。法師殿様。男殿様。祢宜殿様といふもありその宮の外をはしく見えず。さすがにある者は角もなかりて取ていはず。農民のはなのこれなり。これ三百年来の古風なり。こゝしはしらしといふゆゑおそろしてさきいやしきものをのしらぬ。五月なれはあのまで五月にきつき家々みな寺やそつけたるその庭は出る限まてつてひろう事にて二十年許前まではそこかしこに之はきの度々

みのれもつひつなとぞきをはかなきかなしそ。はかなしき
おもえねし世よ志るもをしりとけるハ程もをしり
けれ。それハ安永五年のまくとしえも廿八年はきのすえ
はやしまれしくよのこおろものなれハなすしなとおなれ
すてさりしりのこあめわけきの度よりそく療治
せしハ此老志れて何の用よくれ少く此するむわく條
治せるハけさの度ハまして書生して。その術をとくしおぼえす。
けれと藥もよくもわすれねしやあらむ人のおもく志ね
めるハぜんしてなく此つきけんかこ月のおもくして死
しもしての人の德し天雲となるかひくしりなかし。世

の常なきハ今よはしめぬ事なれしかれハさとさく
はかりなき人のうきことかつしか病なれとハこと此つしき
事のこおほくて世しりくて書ねるやとおそはけし。
あめもう歎しきあつさつましなしきるも母おやりか
かいあ淡路守殿の小方ふ帰るふかの比さきおまいらせて
つこ承よ。
絶えとえを思れなれなりて程すの德や思するる立
久爲今ゝ助殿の作そひ知も。かこ月けかりよりもなう
ひとく紫月長月なしくなるわもて帰きて神せさこの
はしめよなりしう帰るし。五七日と再わくて十日そくりえ。

今ゝ助次の母君様のおいとみ〳〵しまふをそへてひき
こえて。
衣もあらく世やなきかきられし何故ハ高き日數なれとも
空よりてまいりせ給ひ。又先生君ハなを何なきい君ハ化ても二ッ
まくらかしかつねしくもかえて世ゝの何しなきおほし
言のよおもふしをとしてらしなき事かきかなし。
とのこハこれにはとはしくはへあれもよるにいる玉ととくそし
てかしつきしら行末ハおのれちうしをまして貧窮と
きこゆるはもすぐて何事も點つるましくうしろさ
さてもしとおもいつ風よ。雜熱なをいくて心はるきして。

いそうらうつるすくなくいのらぬ神も佛もなすくはしき
阿大事をなそくそとその身をふるくいとおそろ
もしいはかわもとなるやわし神佛をたのけきもおゝ
みもいつるに三日はかありてさきえふきこえ入さまへハ
四紙かれくとしておもはぬことに風おこりわしら世御
おまへの為しはよるおそもいてなす。
蛙なきそのこ弱よりて聲とえなりしいそねく。
万葉集よ楓をも蝦手とうたる所あれといと古よりいひ
しこ人、歌撰集よ、とこの花をいいつるを女のならぬ
家よ住ってこゝちしきくつけまやありなむかし

めづらかなるに田舎わたりにハそのみちきゝなるを
きゝて足引の山田のそほつおもひてひとつのくすれも
歌のうへなく清輔朝臣集に女の手してかきて今ハあやし
きぬかけて立てたる所をしるしにかけたるひしかたかれたき
すゞめ鳥にておどろかすなるをつくりてあつめてやりける
ちひさきひとかたのいへにつけたる口にしてあらためてさる
事也
翁のかめといふもの、その中の紙に書たるもののめハ蟹の目
を墨にかきたる、沙石集にもみえて大象のすがたのあふきの
かためにかきてかゝるたぐひいとおほかりきこえていまハす

空にもかゝれ目のみえぬきみにゝくき君かゝるものかハ
ゐめに見せよ返し、なにのすけにかハ見えずさるハ見えよと
まわぬ人のあふきハかならずしもあらず、延喜式にも
長寛の大神宮ほか紫末遂官符などにもみえたる蟹(カニノ)目汀とも
あるか、汀ともいふそつくりたる汀にて今時もビヨウといふ
蛤の目の細くながくして末のたくさきなるものの類
しるしいふなるべし
尭舜之民比屋可封といふことハ人の例のよくきこえたる也
世の中のならハしもなれハ口ずさみにして当時をとゝのへ源
此ことはいふもことばによりていはゆる事なりそ八九ハ此

一句を解して堯舜の世を解きかし此説のこゝろハ
醫史も象ところ民を丹朱商鈞ハよろこひを巴山ハしらて
事迹にあてこれを忽しらなんまた臣子するく不
肖なりハいへる比屋可封といふめてたへしの山いとめて代
とおりとてうらも生をもしてハあらすいかに財政ハめてさ
くことよろしみもいてくる日月役の道はしれてあれ
といひてそありしき人いよゝるひるなあるいハおしへ
あるいハさとしてひろくしけるやうにするなしその外へ
しも今なりつさとしも律なり經濟のことも律令をふかて
其術あるにましき學者のなをとをしへきことなしや

京都を洛陽長安といふ事をおもひよくそしるる
なるほとこの国に此二つの京名あるきハまこと京をとり
そのまねして何となくいふ事と知られたりそハ中く
おしらねなることなりこれ京を洛陽長安といふ事なりしく
桓武の御時都定めさせ給ひて左京を洛陽城右京を長安
城となつけられしなる御制のまゝにいふことはよろこふの
稱呼なれハ文これかの国をならひつゝなまりいふにあ
らすそのはまなるらハこれと何事も古例を追るとも
朝廷の恒典なるにこの二つハこの国にてはしめてつきし京の名
なれハそれをもちゐられしまでこれ故實なりけりよ

あはまみるよしもなし。次にそれよりもろこしの詩人の弁述
を牛門。小石川を礫川なといふ事ありて皆これハわれ〱の地
にうつりて人をいふくれなし。尤わか付。
紫沖か伊勢物語の語をとりて、ひえの山をはたちはかり
かさねあけたらんやうにして、とあるをはしらす。源氏にもさか
ころもよりなりぬ。猿はなき人の事をうたふることの本意にて
なれられしとおもふは事まのこと限るへきにあらすといひてけり
とハいへともなかこといふ事この説ハおほけなくかれともさきにつき
当用のつとめなるも文にしたかひて條ハことに心得へきなり
しかれとも用るに便ありてわかものにする延約通用なともあり

事のみ多かり。
ある仲すゑのにの松しあはれみしのやうなるおもひをとし老後に
述懐なるはおほかたしくもろもろの事みなしれる事ありとおもひしる事お
ほそもろもに生前ゐるまゝ。俗よりも事なるハ事とこれ本居
先生の説なり。此先生ハ古學者となのる真淵の流にて延
約相通なとむねとして詞をことわる中にもみなことに説の
おほかるハめつらかなめでたし。
勢語臆断におけるもやわかれやみむかしいまもわりなきの。
ものかなしかられを女のこゝろにある不の注に源氏物語の叢稿
なと何事よりつけてかきあらはしてあるなと。物語のおもしろき

文をいへり。これハ私にしたる例證なるべし。すべて注釈ハ
注はなくてハかなふまじきにハ例證なくてハ難解の
發るべし。さりとて無益なる程深くわたれども何の注尺
なかるべし。何の例證なかるべし。近ころれ注釈にも
かゝる無益の引ことしておほくしるせる不急なる所多きを。
ちかころいまうちと見せたるくせなれ。物學の人ハ此
春の神をはさほ姫といふ。佐保ハ山の名。秋の神を立田姫
といふ事、立田も山の名なれバ東西にわかてる高
山なれバ、されともなきの時代の説なるすまるべし。
産あるに小附といふことハいとおかし。培援集に村名数。

事の数つまんとするおりもハいく小附をこのむもの多かるべし
とあり。近き比芭蕉庵といひし人。や駑馬よき弦のしは
つけそへて鞭をおかするむまとあれどもあやしき人
はわが古今讃といふ事を唱へしのくられハよく散木の口
氣なりといひ又うんと時政を憤りける述懐とききえたる。
ける隠遁の身にて何よりいきとおろしかるべし。
清輔朝臣集に寒夜千鳥ぴさきおもるあその川原の
川おろしよそふきたるの勝のはやきに。そもし山おろしハ
山よりふきおろすれるものなれハ。おろしといふを川おろしとも
いふ。英雄人を欺くなる例しも況ともいふべからず。

江家次第春日使のところに中關白為使於亀時山崎家
飲氷魚時依無土器以茶垸獻之關白有疑色亀時得意下
給茶垸渡前云々未用之由歟といへり此茶ハ僧家の物
まてことなる法會の饗なとしてハられしと設くるよりハなる
ましおなるを茶はける家に茶碗のありけるもいまだしき
事なりけり磁器の通称しるしあるしるへ
前栽ともし物語なとにしも草花のうゑにのミ見ゆれと後撰
集にお前栽にうへたりしをもてあさかほの文の書やそく咲たれハ
又家より遠き所にすまける時お前栽の花を折て紀によりいつ
詩なるく十訓抄にお前栽の中の楓の木二本侯にて是程き

すくうなし。ますへ紅葉の木をもいかにこなり。
親鸞聖人の門徒の在家ともの常経に上下ね上ハの
ときる有。又経業の持のえやし方上下の上ハかりなき
なしき事によみいしに十訓抄に大原の聖達田五
人なりつれて高踏ハ宗へあるに河内國石川郡に留けり
家主ハ紺の直垂をうちしてく黍ハきうすることなかり
ひとしもけるためしあめるなり
茶垸を磁器の通称なりといふ事又一條十訓抄に近
くハ徳大寺の右の大臣うちまつせてハいひおもしき安郁の
すく。師子形をつくりける茶垸の枕を奉るとありけり

しれ紙をやりく料紙を書て。むすびたるねは唐まよう〳〵し入たり。又ひつくは、なれどもこれに君に出でこなれよかくはぬ枕をの枕なり。母といひ。磁器の枕をいふに似たり。今磁器ある家を茶碗屋といふ。よしなきことなる事

平野社をそのうへ殊なる神崇なりとを今も定なる人なれども。此社のいかなる荒まじひておかしき事なりこうし心くらし。平家の氏神なりしとかいはし。まず今は源氏の代なれば無沙汰なり。なと民間にていへとはなましあるしみのつらき思ふあるまじ。平家の氏神なる條は。何それの書にもみえたるを抄してもしるべし。一ツ

二ツある中。今院といふことのうへの國母とはさらにのみにて、いかにおなじくしたる上達部殿上人みな忘れては多くきこえ侍り。又平野は、あまたの家の氏神にておはします也。此名もなかりきをいふの神道のはじめなりけるにや。清輔朝臣集に平家の人々のつかふるよろこびにみひの保安平野の松にて、ふるの高きくしくらへて讀し侍りけりなるべし。

人の実名を字音によぶ事。江談抄に天暦皇帝召道風朝臣勅云我朝上手何人哉。申云空海敏行。時人難云於大師御名可奏音讀也。敏行事ハ猶止志由岐止奈年可

奏ミこの外に道風佐理行成ミなる能書ありき。基俊ミ
頼後成定家ミ隆ミなる歌人ありき家様になるに。寂
定家成雅頼なと何しなき人も見ゆ。定家ミ隆ミを限と
して。ミ後ハたえて聞えず。

壬生二品家隆の家なるおる人の事をなどとよおすより侍
らり。隆祐朝臣の子にありて。やそ彼卿ト如朝ハしらり。
名なく何ともつく見きなと沙汰しなるを。あつての事ミ
為後といふおありきし侍りすく。なおくこなるハ此度よ沈
一家ハミなる隆の家をあすの家おるへハ。いたえくとさるなまる
らわらるくやなんと。ほしくけるにゆかしるなそ

いふも人ミちらしハ詞より限ありし。為後ら父恩書名為ゆき
こゝいふよ沙ハらるかしきを。ハ卩しも成の法名家々と見て
まねらせぬりといつくいそろふあまいろちねりあるへきと
い事ほるしをかるりあやろといそれて法しめて寺殿の名
察なく家隆として立ちあれをて。此世よ又法し帖
此為れし法しきりなる此興の事はてきられく。入興せり
れなりとみえ。此お源古今着聞集よこえたり。そのうミ
わまらぬて家なるよと見えしより云家へし。
おこその果の事を結句とい事。口あるき来の法息とを
くらゆ。詩の結句よおらう法ありて。今ハおろくとい事。速

弘ゝの攀白よめうつ作せ。

享和三年癸亥十二月十五日成(一巻)

正明

尾陽東壁堂藏目録之内歌書之部

古事記傳 全四十八冊
神代正語 全三冊
神壽後釋 全二冊
玉くしげ 全一冊
古今遠鏡 全六冊
天祖都城辨々 全一冊
御僊行長哥 全一冊
源氏物語手枕 全一冊
玉勝間 全十五冊
地名字音轉用例 全一冊
直毘靈 全一冊
美濃家づと 全五冊
同 折添 全三冊
曆朝詔詞解 全六冊
三代考 全一冊
萬我の比禮 全一冊

萬葉集略解	全三十冊
後選集新抄	全十五冊
遷宮物語	全三冊
熱田縁記	全一冊
志ゝのしみゝ物語	全二冊
多ゝ隨筆	全五冊
冠位通考	全一冊
江戸職人哥合	全二冊
尾張家づと	全九冊
伊勢物語	全二冊
鶉衣	全十二冊
枇杷園七部集	全四冊
同 發句集	全四冊
同 霍芝集	全五冊
狂哥初日集	全二冊
同 夕荒集	全二冊
同 初心集	全一冊
同 不卜集	全三冊
同年中行事	全二冊
同作者部類	全二冊

尾張乃家苞

新古今集注解

新古今集ハ俊成定家の風かく二條家冷泉家の源なりまた風調をむねとしたるうたのみなれば古学好奇人も信ふすへくしぞ必よむ可き書なりなど趣あるところ深くて容易(たやすく)解えがたき此書ハ満る所(こころ)を注し美濃の家苞の得失を論し歌の體裁をわきまへ人第一義を得る階梯(かけはし)なり

尾陽書肆　東壁堂欽白